

韓国における丸山眞男

趙 星 銀

一．イントロダクション

本日、私の報告のタイトルは「韓国における丸山眞男」であります。「丸山眞男における韓国」ではありません。つまりこの報告の目的は、日本とは違った韓国という環境の中で丸山の著作がどのように読まれ、理解され、或は誤解されているかを紹介することにあります。従いましてこの報告は丸山の思想の内部に関する内容というよりは、丸山という思想家が韓国という特定の世界・歴史の環境の中に投げられた時、どのような面が誇張的に宣伝され、拡大されて見えて、そしてどのような面が見えにくくなるのか、そうした思想の外部との関連性に重点をおく報告になると思います。

この報告は二部構成になります。前半では、韓国という環境、特に一九四五年以降の時代の性格について、それを日本のそれと比較しながら簡略に説明します。その時のキーワードは「植民地時代」と「分

断状況」という二つに圧縮することができます。そして実際の歴史であり、同時につねに克服の課題でもある、これら「植民地」と「分断」の問題群の中で、丸山がどのように位置づけられているか、或は位置づけられうるかについて報告の後半でお話することになります。

二．「非・戦後史」としての韓国現代史

(一) 「戦後」日本と「解放後」韓国

一九四五年八月一日、第二次世界大戦の終戦をつげる昭和天皇の玉音放送があったこの日以降の時代を、日本では通常「戦後」と呼びます。そしてその戦後の歴史を振り返ってみると、それが大きく二つの時代に分けられるのではないかという見解に、多くの歴史学者・社会学者が同意しています。

それはまず、焼け跡・闇市の混乱、占領期、新憲法と民主主義の定

着、五五年体制の成立、そして高度経済成長を骨子とする、一九四五年から七〇年代初頭までを戦後の第一期と捉え、そして一九七三年のオイル・ショックを基点として安定成長期に入り、かつての戦後時代とは異なる社会問題や現象が現れた高度成長以降の時代を戦後の第二期と捉えることとなります。

社会学者の見田宗介は、この時代区分を社会的なリアリティの変容という観点から「理想」や「夢」の時代から「虚構」の時代へとという風に捉えました。見田によると、まず一九四五年から六〇年ごろまでは、社会主義であれ、アメリカン・ライフスタイルであれ、何か時代の「理想」があり、それを現実化する方向へとリアリティ感覚が働いていたとします。そしてその後の七〇年代初頭までは、どんどん増えてくる物質的な豊かさにある種の違和感を感じながらも、現実の彼方に「夢」というものが描かれた時代だと言います。

ところがその後、特に八〇年代以降の時代になると、現実とその彼方との緊張関係が失われ、むしろ虚構なるものへ積極的に向かうという感覚が生活を規定することになると見田は言っています。これを産業構造の面で言うと、重化学工業から情報・サービス産業へ、そして世界秩序の側面では冷戦世界からポスト冷戦世界へ、或は時代のモニュメントとしては東京タワーから東京ディズニーランドへとという風に二つの時期の違いを説明して、「両者を「戦後世界」と「ポスト戦後世界」として整理したのが、社会学者の吉見俊哉です。その他に、小熊英二、安丸良夫などの歴史家も、高度成長期を境目に戦後を二つに

分けるという時代区分に同意しています。

しかし、このような日本の戦後史の流れに照らしてみると、同じ時期の韓国の人々は実はかなり異質な時代を生きていたということが分かります。何よりもまず、一九四五年八月一五日以降の時代を、韓国では「戦後」と呼んでいません。韓国ではこの日を、光を取り戻した日、すなわち国権を回復した日という意味で「光復節」と呼んでいます。そしてこの日に起こった歴史的な事件の意味を、日本のように終戦、或は敗戦ではなく、「解放」と捉えています。つまりそれを戦争から平和へ、War and Peaceの時代転換ではなく、他国の支配から民族が独立し解放したという、支配と解放、Domination and Liberationの時代と見ているわけです。

通常、韓国では一九一〇年の日韓併合から一九四五年の「光復節」に至る三六年間の時間が、一つの歴史的な固まりとして考えられており、それは「植民地時代」と呼ばれています。そしてその植民地時代の中に第一世界大戦と第二次世界大戦が含まれているのです。韓国の歴史感覚においては、両世界大戦のもたらした時代の違いよりも、植民地時代の持つ歴史的な連続性の意義の方がより直接的であり、より強く大きく認識されているということになります。

(二)「解放」その後

この「解放」というのは具体的に、外交・治安・行政など一つの国家の運営と進路の決定を他の国家の手に任せずその国の人々が行うと

いうことを意味します。それは植民地状態における様々な暴力と卑屈からの脱出、そして自由を意味しました。しかし同時にこの「解放」は、社会的な大混乱を呼び起こしました。かつての支配者が消えてゆく状況の中で、その外交・治安・行政などを担当すべき新しい担い手が、明確に定められていなかったからです。

一つの正統性を主張することのできる政治的リーダーシップの空白は、当然、数多くの政党と社会団体の噴出を導きます。この中で、解放の後二ヶ月の間に、新しく作られた政党の数は五四個に至り、解放から一年間で作られた政党の数は三〇〇近くまで増えることになりました。

歴史的な大転換を迎えたこの混乱の一方で、一九四五年九月からは、同年二月のヤルタ会談で非公式に決められた方針に従って、朝鮮半島の緯度三八度線を基準に、南はアメリカ軍が、北はソ連軍が代理的に統治をするという、いわゆる「信託統治」の時代が訪れます。一九四八年まで続くこの分断信託統治の下で、アメリカとソ連のイデオロギー対立を背景にして、朝鮮半島での理念紛争が本格化します。そして一九五〇年には、やがて戦争の形で激化します。これが朝鮮戦争です。

朝鮮戦争は内戦の形をとっていますが、アメリカとソ連・中国の意図がそれを大きく左右した国際戦争であり、理念戦争でもある、複雑な性格を持っています。この戦争が三年間続きました。戦況は何度も変わって、北朝鮮が中部以南までおりて来たこともあれば、韓国・ア

メリカ連合軍が平壤まで行ったこともあります。この三年間の戦争は、二〇〇万人の死亡者、基幹産業の崩壊、そして韓国政府が一時的に釜山にまで移転するなどの、国全体の焦土化をもたらしました。しかしより深刻な問題は、この戦争がはっきりと終わっていないということです。

(三) 「終わらない戦争」の不安と独裁

一九五三年七月に、南と北の間に停戦協定が結ばれました。繰り返しますが、これは終戦ではなく、休戦に合意したものです。つまり韓国の現代史の大部分は、厳密に言えば、「戦後」の時代ではなく、戦中の時代に属するのです。日本では五〇年代半ばから「もはや戦後ではない」ということがしばしば言われましたが、韓国に言わせると、「未だ戦後ではない」ということになるかもしれません。

この点は、休戦状態が五〇年以上を過ぎて、事実上固着化している今日においては忘れられがちなことですが、実は韓国の政治・社会・文化・思想の多くの部分は、この点を考慮しないと理解しにくいところが多いと思います。特に朝鮮戦争以後、三〇年も続く、軍部出身者の長期執権、つまり独裁政治と分断状況は密接に関連しています。どのような社会でも、もちろん独裁者が現れるのは可能ですが、それが長期的に、安定して続くためには、一個人の武力的な弾圧だけでは難しく、社会における一定の客観的な条件が必要ですが、韓国ではこの休戦中の分断状況がその役割を果たしたのであります。

特に朝鮮戦争直後の時代の政治は民主政治とは言えないものであり、また。たとえば野党の議員たちを拉致に近い形で連行し、投獄し、彼らをまた必要に応じて国会に出席させ、起立方式で票決を行う形で「議会政治」が運営されることもありました。そしてその行為に反発する人、政治的な立場を異にする人は、「アカ」とよばれました。彼らはコミュニストのスパイ、内乱を起こして敵軍の侵略を誘導しようとする反国家的な存在と決めつけられ、強力な処罰を受けました。

「アカ」という表現は、単に教育、或は宣伝などの大衆操作のレベルだけではなく、実際にデモに参加した市民に向かって銃を打たせるための論理でもありました。独裁時代には時折、戒厳令というものが宣布されましたが、戒厳令の宣布は、憲法の一部権限が停止し、大統領の任意で違法と合法が判断されることを意味します。つまりこの「アカ」という言葉で、状況によっては合法的に命を奪われることも可能なのです。韓国には一九六一年から八〇年まで「反共法」という法律があり、その後これは「国家保安法」にかわりりましたが、つまりこの法律は、「反共」を「国の法」として決めていたことを意味します。この点は、共産党が合法政党として存在し、しかもだんだん力を失っている戦後の日本とは非常に大きな違いです。

付け加えますと、このような長期独裁の歴史は、一般に政治、あるいは「政治的なるもの」に対するイメージを、かなり強く怖いものを作り上げました。また政治の力が全能であるように思われると、そこから政治への過剰期待と過剰絶望も生まれます。また、長い独裁時代

の間、民主化の要求に対して主に産業化の論理が対置されてきたので、この「産業化」のイメージも日本よりかなり暴力的なところがあります。要するに、植民地時代とその後に分断、そして独裁の経験の中で、より民主的な政治とより豊かな経済をどのようなバランスで推進して行くかが、韓国の知識人たちを悩ませた問題であります。

三．丸山への視線

(一) 翻訳・研究現況

それでは、以上のような環境の中に丸山の著作を入れてみると、どのような結果になるのでしょうか。それを考えるために、まずは韓国における丸山の翻訳・研究の現況を簡略に紹介します。

丸山の著作が初めて韓国に出版されたのは『日本政治思想史研究』が翻訳・出版された一九九五年のことです。この本は、韓国で非常に有名な、多少エクセントリックな東洋哲学者である金容沃という人物の出版社から出ました。その時、金は、『日本政治思想史研究』に長文の解題を付けていますが、その中で彼は、韓国における『日本政治思想史研究』の意義についてこう説明しています。「朝鮮性理学に対する韓国学者たちの探求方法の最大の欠陥は、哲学史だけがあって思想史が不在しているという点である。退溪哲学、栗谷哲学、韓国哲学という名の下で、退溪や栗谷の言語の意味構造を究明しようとしてい

るだけで、彼らが言わんとしたことがその時代において、そして今日の我々にとって、どのような意義、historical significanceを持つているか、その相対的な、歴史的な関係性を見ようとしなさい。退溪哲学を語る者は、まるで退溪哲学という巨大な岩のような実体が歴史の中に存在すると前提しているような誤謬に陥っている。……丸山の「思想史」はこのような「哲学史」の誤謬を克服した東アジア文明圏の最初の突破口と評価して良いだろう。

つまり、思想家のテキストの語意だけでなく、それが時代の中で持つ意味や関係性の解明に分析の主眼を置く、「思想史」の学問的伝統が韓国には弱くて、そのような韓国において、丸山のこの著作は学問のジャンル、或は学のモデルとして価値があるというのが一つのポイントです。またこの著作はたとえば荻生徂徠研究、日本近世と近代思想の専門研究として、いわば一流のアカデミズムの業績であるので、そのような業績は人類が共有すべき普遍的な価値のあるものとも言えるでしょう。

しかし丸山の韓国での意義は、たとえば物理学におけるステイーブン・ホーキングの業績のように、その学者の国籍を問わないニュートラルなものではありません。それははっきりと、「国籍性」、「日本性」をおびている仕事として強く意識され、宣伝され、受け止められています。この点はたとえばこの本の装丁をみても分かりますが、なによりまず、全体の八割を占めている、強烈な真っ赤な丸が目に入ります。それに縦書きの漢字で「日本政治思想史研究」と書いてあるのも、韓

国の本としては特殊な雰囲気を出しており、つまり露骨的に「日本」の色を強調しています。その装丁のセンスの良さ悪さは問わないとして、その意図は明瞭です。この中には「日本」について、何か深い真実が書かれていると、この本は表紙から主張しているのです。

この出版から二年後、今度はオーソドックスな人文書出版社である「ハンギル社」から、「グレート・ブックス」というシリーズの一冊として『現代政治の思想と行動』が翻訳・出版されます。このシリーズの他の著者を見ると、たとえばアリストテレス、ヘーゲル、ルソー、トクヴィルから、アドルノ、アレント、レヴィ・ストロースなどの名前が、そして韓国の著者としては、朝鮮時代の儒者である丁若鏞などが含まれています。全一〇〇冊のシリーズの中で、日本人の著作はこの『現代政治の思想と行動』が唯一です。その後、『日本の思想』、『忠誠と反逆』、『文明論之概略を読む』など、現在韓国に翻訳されている丸山の著書は『日本の思想』の改訂版を含めて以下の九冊です。

翻訳リスト

- 『日本政治思想史研究』丸山眞男著・金錫根訳（トンナム、一九九五年）
- 『現代政治の思想と行動』丸山眞男著・金錫根訳（ハンギル社、一九九七年）

- 『思想史の方法と対象』武田清子編・高宰錫訳（小花、一九九七年）
- 『日本の思想』丸山眞男著・金錫根訳（ハンギル社、一九九八年）

『忠誠と反逆』丸山眞男著・朴忠錫、金錫根共訳（ナナム、一九九八年）

『翻訳と日本の近代』丸山眞男、加藤周二共著・任城模訳（イサン、二〇〇〇年）

二〇〇〇年）

『文明論之概略を読む』丸山眞男著・金錫根訳（文学ドクネ、二〇〇七年）

『戦中と戦後の間1936―1945』丸山眞男、政治学の起源と思惟の根源を読む』丸山眞男著・金錫根訳（ヒューマニスト、二〇一一年）

『改訂版 日本の思想』丸山眞男著・金錫根訳（ハンギル社、二〇一二年）

丸山を主な研究の対象とする研究書も、『大塚久雄と丸山眞男』を初めとして四冊が出ていますが、すべて日本の研究書の翻訳書です。学術論文の分野で丸山を対象にしている論文は、書評などを含めて四〇件以上がデータベースで検索されます。去年はソウルのアサン政策研究院で丸山眞男の思想のみを取り上げるシンポジウムが開かれたこともあり、今年も続かれる予定だそうです。また韓国、中国、日本、台湾、香港の東アジアの出版人たちが、お互い共有すべき価値のある現代の古典を選定した「東アジア人文書一〇〇冊」にも、丸山の『講義録』が選ばれています（『東アジア人文書100』みすず書房、二〇一一年）。

韓国のジャーナリズムにおいても丸山への言及を探すことは難しく

ありません。新聞記事などのデータベースで検索するだけで、二〇〇件以上の丸山への言及が出てくるのですが、それは大体三つの文脈においてです。第一に、書評を中心とした学術的な紹介です。第二に、丸山を引用した政治批評です。特に日本の右傾化を批判する時、よく彼の「無責任の体系」などの言葉が引かれています。日本という文脈を離れた政治一般に関する場合においても、丸山の著作は参照されています。道徳と政治、支配と服従、政治的人間論など、政治の様々な問題について丸山の思惟を借りた評論が、特に知識人の書くコラムなどにおいて多数発見されます。

そして第三の文脈は、丸山への批判です。その論調は主に丸山の「日本中心性」、あるいは「アジアを見ていない」といったものでありますが、この場合、丸山自身の思想よりも、彼の福沢諭吉解釈を問題にする場合が多数目に立ちます。これは偶然なことではありません。

（二）日本の「近代化」と「日本」の近代化

日本近代化の先駆的な思想家である福沢諭吉は、韓国で非常に評価の難しい人物の一人です。韓国において、「近代化」の一つの柱である国民国家の形成という課題の達成のためには、封建性の克服だけではなく、植民地性の克服も要求されているからです。福沢は、植民地支配を正当化して日本の近代化を進めた思想家であると韓国ではひろく理解されています。近代化の父といっても、「日本」の近代化の父であり、朝鮮にとっては侵略者としての顔が大きく見えているわけ

あります。ここで考えなければならぬ一つは、知的な営み、特に「日本」と関連する知的な仕事の意義を、決定的には、植民地問題の解決に求めようとする、韓国現代史の強烈な欲望です。それにどこまで抵抗しながら有意義な答えを出せるかが、韓国の日本研究者の宿命的な課題になっています。

しかしここで私が言いたいことは、もっと単純なことです。至極当然のことですが、丸山が「日本」の思想家である、という点です。そして日本国内ではあまり意識されない彼の「国籍」が、韓国では極めて敏感に認識されているということです。そのような韓国からの視線では、侵略的な近代主義者福沢を偉大な思想家とし、「福沢惚れ」を自認する丸山を見ると、何か釈然としない感覚を覚えることになるわけです。

韓国ではむしろ、丸山の福沢論に対して、それは福沢自身の思想というよりは丸山の思想が強く働いているものとし、丸山の描く福沢像を「丸山論吉」であると批判した安川寿之輔の福沢論の方が注目を集めています。安川の著作『福沢論吉のアジア認識』が韓国に翻訳された時、そのタイトルが『福沢論吉のアジア侵略思想を問う』になったのは象徴的です。

丸山の福沢論をこの場で語るのは、私の力量をはるかに超えることになりまますので避けますが、しかしここで一つだけ考えておきたい点があります。それは、このような丸山の福沢解釈を含める思想史の方法が、韓国の歴史研究に大きなヒントになってくれるのではないかと

いう点です。丸山は、一九六〇年の文章「思想史の考え方」と一九六一年の単行本『日本の思想』のあとがきにおいて、思想をその「可能性においてとらえる」こと、すなわち「反動」的なものなかに「革命的」な契機を、服従の教説のなかにも反逆の契機を「見出す思想的的方法について繰り返し述べてきました。丸山の福沢解釈は、ナショナリストたちに賞賛される福沢象とは全く違う面に注目して新しい福沢象を作り出すことによって、ある意味、その思想家を救い出す行為ではなかったでしょうか。

このような方法は、植民地時代、そして冷戦時代を経過しながら、白黒ではつきりと評価できない、解釈の難しい人物、事件、いわば灰色の地帯（グレー・ゾーン）がたくさん残っている韓国の歴史・思想史の仕事に、貴重なモデルになるのではないかと思います。親日か反日か、北か南かの白黒の尺度で裁断して行くと、どうしても思想の潔白性だけを求めることになり、さらに、その尺度では到底説明することの出来ない人間や思想の問題は、いつの間にか議論の場そのものから脱落してしまい、議論の世界はますます貧弱になってゆくことになります。もちろん、このグレー・ゾーンはまだ簡単に接近することの出来ない危険領域ではあります。しかしここは結局、韓国の近・現代を考えるために避けて通ることのできないところであり、その時、研究や議論の指針になりうる方法や基準は極めて少ないです。その中で、丸山という「可能性において思想をとらえる」という思想史の方法は、数少ない手がかりの一つになってくれるのではないのでしょうか。

(三)「反・反共主義」の意味

二番目の論点は、韓国の分断と冷戦、そしてマルクス主義との関係にあります。韓国でマルクスの著作は一九八〇年代後半まで禁書でした。一九四七―四八年、解放直後の混乱の中で『資本論』がこっそりと出版されたことがあります、すぐ出版禁止になり、その次に出たのが、大々的な民主化抗争のあった一九八七年のことです。「理論と実践」という出版社で、当時翻訳者たちは偽名を使って『資本論』を出しました。出版社の社長は国家保安法違反罪ですぐ拘束されましたが、しかし『資本論』を審議した検察側が、どう読んでもこれが不穏な思想であることが証明できないということで釈放されたというエピソードがあります。

しかしここで一つ悲喜劇的な歴史の転換が起こります。解禁から三年後に東西ドイツが統一、そして一九九一年にはソ連が崩壊したのです。これで社会主義思想は危険な思想から失敗した思想へと急変しました。何十年も禁じられていて、ようやく解禁されて間もなく、今度は無用なものとして扱われることになったのです。これは、韓国の土壤の上で、学術的にも、社会的にも、それが理解され、討論され、批判され、正当に評価される機会を持たなかったことを意味します。

日本では逆に、戦後初期の時代、マルクス主義者やそれへのシンパサイザーが知識人世界の優位を占めていました。その権威の理由の一つは、戦時中、公然に日本ファシズムに反対したのが当時非合法政党

として存在した日本共産党を中心とするコミュニストたちであったという事情がありました。そして共産党とは一線を画していましたが、やはり社会主義のヴィジョンを持った社会党も、戦後、企業勤労者六割の組織率を誇る日本労働組合総評議会（略称総評）の支持を手に入れたのですが、その権威については「昔陸軍、今総評」という流行語があったくらいでした。

丸山は、戦争に積極的に反対することが出来なかったという「悔恨」を、彼自身を含む日本の戦後知識人の特徴として語っていました。しかし彼の場合、そのような悔恨が社会主義路線への支持に直接的につながったわけではありません。むしろ丸山はアカデミズムにおける圧倒的なマルクス主義の優位の中で、「対象としての天皇制と、方法論としてのマルクス主義」を、自らの二つの敵と設定し、それと闘ってきたという自意識を持っていました。そうでありながら、なお、その敵であるマルクス主義への弾圧（レッド・パージ）には自由主義者として厳しく反対しました。

このような自由主義者としての「反・反共主義」の立場は、韓国においては非常に誤解されやすい、正確に理解され難いものです。自由主義といえ、共産主義から資本主義世界の自由を守るという「反共・自由主義」の伝統が強いからです。また自由主義の中で、国家に対する個人、権力に対する道徳、そして集団行動とメンバー個人の内面の問題を社会的な自由の問題として考える経験も貧弱であるのが事実です。

政治的な革新派であっても、冷戦思考の克服や反共主義からの脱却を試みるうちに、これが分断状況の特殊な状況と相まって、容易に「民族主義」へと傾斜する傾向が強いのも、韓国社会の特徴です。加えて、軍部独裁という巨大な敵と闘ってきたため、それへの対抗物として「個人」を積極的かつ肯定的なシンボルとする政治運動は、かつて起こりにくかった面もあります。そのため「私」より強い「我々」意識が、革新運動の中にも強くのこっており、大きな抑圧に対しては反対を主張する集団においても、むしろその大義名分の下で集団内のマイノリティや少数意見に対しては小さな抑圧を生んでいる部分が、韓国社会には深く残っています。

自分と異なる他者の主張や立場に対して、それに反対しながらも、それが存在する自由を擁護する、この丸山の自由主義者としての「反・反共主義」の意味を理解することは、冷戦構造に拘束されながらもなお思考におけるポスト冷戦主義を課題としている韓国において、何より貴重な出発点になるのではないのでしょうか。

以上、歴史認識や評価の方法、そして社会的な自由の成長の面で、韓国社会の持つ特殊性をやや強調した報告になったかもしれませんが、より普遍的な文脈の中で考えてみると、健全な個人の確立、そしてその個人と公共的なものとの関わり方が社会の課題として考えられる限り、丸山はこれからも掘り出すべきものの豊かな鉱脈ではないかと思えます。

報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。